

## 【令和8年度研究協議会趣旨文（案）】

### 中学校・高等学校国語科におけるあたらしい授業づくりへの取り組みと課題2（継続）

平成28年から平成30年にかけて改訂された今次の中学校・高等学校学習指導要領の施行が高等学校最終学年にまで及び、令和6年度に実施された大学入試共通テストでは、新しい授業科目が出題の対象となりました。令和7年度には、中学校で、部分改訂された教科書による国語科授業が行われ、高等学校においては、改定された必修科目「言語文化」「現代の国語」教科書の見本本により、教科書採択の再検討が行われようとしています。

こうした経過をふまえると、今は、新しい教育課程に沿った授業を日々進める上で何が達成されて、どういう課題が残されているのかということを変更して議論し、これからの国語科教育をどのように展開すればよいかを検討する時期と考えます。これまで、本学会の協議会では次のようなテーマで今次の学習指導要領への対応をふまえた国語科授業のあり方について議論を進めて参りました。令和5年度は、「高等学校国語科学習指導の実際―「現代の国語」「言語文化」を中心に―」というテーマで、高等学校の新授業科目における授業のあり方について検討しました。また、令和6年度は、「中学校・高等学校「読むこと」の新教材と授業づくり」というテーマで、主体的・対話的で深い学びを実現する授業について議論しました。令和7年度には、「中学校・高等学校におけるあたらしい授業づくりへの取り組みと課題」と題して、これまでの成果と次なる課題について検討を行うこととしています。

国語科には、特に「読むこと」の領域において、「走れメロス」「羅生門」「夢十夜 第一夜」「水の東西」など、授業実践を規定するいわゆる「定番」教材が存在します。一方で、「社会に開かれた教育課程」を目指しているのが現在の学習指導要領の大きな特徴ともされます。令和6年度の協議会では、新旧教材がどのように生徒の将来につながる学習の契機になるかということを見極め、授業づくりにあらたに取り組んでいけばいいのかを議論しましたが、令和7年度の協議会では、これまでの取り組みを振り返り、将来に向けたさらなる課題を検討いたします。そしてこのことは、今後も継続して検討すべき問題でもあります。

カリキュラムや授業を「社会に開かれた」ものにするということは実用的なことをそのまま知識として習得させればよいということではなく、学習者が生きていくための原動力を授業で育てることが必要です。生徒が夢中になるほんもの(authentic)の学びこそが、学んだことを自らの人生の中でいかすことにつながるのではないのでしょうか。そうした学びを国語科で経験させるためにはどうすればいいのか。課題はどこにあるのか。本学会令和8年度の研究協議会では、こうした課題に継続して取り組んでいきたいと考えます。